

主 題：最後まで主に信頼して
聖書箇所：詩篇25篇

テーマ：さまざまな困難にこの世で直面する中で、最後まで忠実に歩むにはどうしたらよいか

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは、詩篇25篇です。まずみことばをお読みしたいと思います。

詩篇25篇 ダビデによる

「:1 【主】よ。私のたましいは、あなたを仰いでいます。:2 わが神。私は、あなたに信頼いたします。どうか私が恥を見ないようにしてください。私の敵が私に勝ち誇らないようにしてください。:3 まことに、あなたを待ち望む者はだれも恥を見ません。ゆえもなく裏切る者は恥を見ます。:4 【主】よ。あなたの道を私に知らせ、あなたの小道を私に教えてください。:5 あなたの真理のうちに私を導き、私を教えてください。あなたこそ、私の救いの神、私は、あなたを一日中待ち望んでいるのです。:6 【主】よ。あなたのあわれみと恵みを覚えていてください。それらはとこしえからあったのですから。:7 私の若い時の罪やそむきを覚えていないでください。あなたの恵みによって、私を覚えていてください。【主】よ。あなたのいつくしみのゆえに。:8 【主】は、いつくしみ深く、正しくあられる。それゆえ、罪人に道を教えられる。:9 主は貧しい者を公義に導き、貧しい者にご自身の道を教えられる。:10 【主】の小道はみな恵みと、まことである。その契約とそのさとしを守る者には。:11 【主】よ。御名のために、私の咎をお赦しください。大きな咎を。:12 【主】を恐れる人は、だれか。主はその人に選ぶべき道を教えられる。:13 その人のたましいは、しあわせの中に住み、その子孫は地を受け継ごう。:14 【主】はご自身を恐れる者と親しくされ、ご自身の契約を彼らにお知らせになる。:15 私の目はいつも【主】に向かう。主が私の足を網から引き出してくださるから。:16 私に御顔を向け、私をあわれんでください。私はただひとりで、悩んでいます。:17 私の心の苦しみが大きくなりました。どうか、苦悩のうちから私を引き出してください。:18 私の悩みと労苦を見て、私のすべての罪を赦してください。:19 私の敵がどんなに多いかを見てください。彼らは暴虐な憎しみで、私を憎んでいます。:20 私のたましいを守り、私を救い出してください。私が恥を見ないようにしてください。私はあなたに身を避けています。:21 誠実と正しさが私を保ちますように。私はあなたを待ち望んでいます。:22 神よ。イスラエルを、そのすべての苦しみから贖い出してください。」

さて、今回私たちがこの詩篇を通して学びたいことは、最後まで主に信頼するということです。皆さんもよくご存じのように、この世界で生きていくことにはさまざまな困難や難しさが伴います。生まれてから死ぬまで、いっさい何の問題にも直面することなく過ごせる人は残念ながらいません。中高生や大学生といった若者から、壮年や中年、年配の方に至るまで、どの世代の人であろうといろいろな場面で悲しみや痛みを覚え、苦しむことがあります。また、年齢を重ねれば重ねるほど、困難が減っていくわけではなく、仕事や家庭での責任が増し加わり、人間関係や自分自身のからだのことでさえ問題が多岐にわたるようになっていくのです。何にも心を騒がされることなく平安に過ごしたいと願ったとしても、次の瞬間には、果たして自分はこの困難を乗り越えられるのだろうかといった不安や恐れを抱かせる出来事に出くわすことがあるのです。そのことは私よりも皆さんの方がよくご存じだと思います。

今の自分自身とこの世での人生を終えようとしている自分自身の姿を思い浮かべてみてください。神様が残りどれだけの日数をひとりひとりに与えているかはだれにもわかりません。でも、私たちは例外なく死を迎えるその日に向かって、少しずつ歩みを進めているのです。また何より、主を愛する信仰者は、最後、神様にお会いして、この方と永遠をともに過ごす日を楽しみにしているはずで、でもそこ

までたどり着くための旅路は簡単なものではありません。そこにたどり着くまでの道は曲がりくねり、いろいろなところに危険なくぼみや穴があります。まっすぐに歩いて行こうとしても、大きな障害物や敵がその道を妨げていたり、いろいろな困難や誘惑が脇道へそれて行くようにと邪魔をしたりするので。そしてそれらによって苦しめられる私たちは、落ち込み、失望を覚えてしまうこともあります。ある時は、そういった障害物や困難が私たちの外側から来るものかもしれません。アダムとエバが神様に逆らって、罪がこの世に入って以来、私たちの住む世界は罪に汚染されています。だからこそ、私たちは置かれた環境や状況、周りの人々によって動揺し、心が騒がされることがあるのです。また、信仰者として忠実に歩もうとすれば、その信仰のゆえに、困難や理不尽な扱いを受けることもあります。そして、私たちの敵であるサタンも、私たちの目をキリストから奪って、心から希望や喜びを取ろうとして、ほえたける獅子のように獲物を探し回って歩いているのです。間違いなく、いろいろな難しさが私たちの外側には存在しています。

それだけではありません。ある時はそういった難しさが私たちの内側から来るものかもしれません。言いかえれば、この世界が罪によって汚れているだけでなく、私たち自身が罪人であるからこそ、数多くの問題が生じるのです。肉の欲や罪の誘惑に打ち勝つことができずに、繰り返し敗北を喫し、それによって喜びや平安を失っている人もいるかもしれません。私たちの何気ない言葉や振る舞いが人を傷つけることもありますし、また自分自身が過去に犯した罪や間違いがいつまでも脳裏から離れずに、事あるごとにそれが思い出されて悲しみを覚えることもあるかもしれません。もし神様が自分の過去の罪を覚えていて、それに対してずっと怒っておられて、ひどい罪を犯した私にはもう助けなど与えてくれないのではないだろうか、私たちがそんな思いを心のうちに持ち続ければ、心は落ち着くことができず、不安の中でもがき苦しんでしまうでしょう。こうして私たちが神様にお会いするその日を目指して進む過程を考えてみれば、そこにはさまざまな危険や敵や痛みが必ず待ち受けていることを私たちは知っています。だれも望んではいないけれども、私たちの心を悲しみに満たしたり、恐れや不安でくじけさせようとする、そんな苦しみに私たちは直面します。果たして自分は最後まで無事にたどり着くことができるのだろうか、そんな思いが私たちのうちに浮かんでくることもあるかもしれません。では一体どうすれば、そんな苦難が伴う旅路にあって、私たちは道からそれることなく忠実に歩み続けることができるのでしょうか？途中であきらめてしまうことなく、最後までたどり着くことができるのでしょうか？

きょう私たちが見るこの詩篇25篇は、その答えを、その励ましを私たちに与えてくれています。この詩篇を記したダビデ自身も数多くの苦しみを経験していました。しかし、そんな苦しみの中にあつて、彼は主に信頼して歩み続けたのです。だからこそ、私たちがこの詩篇25篇を通して、彼の姿を見る時に、最後まで主に信頼するということが何を意味するのかを学ぶことができるのです。

●背景：ダビデの経験していた苦しみ 16-21節

これからそんなダビデの残した模範を皆さんと一緒に見ていくのですが、その前にまずダビデ自身がどのような苦難を味わっていたのかを考えてみましょう。その背景を考えるために、まず16-21節のみことばを見たいと思います。

▶五つの苦しみ

ダビデがどんな状況の中でこの詩篇を書いたのか、その具体的な歴史的背景についてはだれにもわかっていません。しかし、16-21節に記されたことばを見れば、ダビデがその時に直面していた幾つかの問題を見て取ることができます。16節からよく見てください。「:16 私に御顔を向け、私をあわれんでください。私はただひとり、悩んでいます。:17 私の心の苦しみが大きくなりました。どうか、苦悩のうちから私を引き出してください。:18 私の悩みと労苦を見て、私のすべての罪を赦してください。:19 私の敵がどんなに多いかを見てください。彼らは暴虐な憎しみに、私を憎んでいます。:20 私のたましいを守り、私を救

い出してください。私が恥を見ないようにしてください。私はあなたに身を避けています。:21 誠実と正しさが私を保ちますように。私はあなたを待ち望んでいます。」と書いてあります。

さて、ダビデが経験していた苦しみが少なくとも五つ、ここに記されていました。

a) 孤独 16節

16節の後半部分を見れば、「私はただひとりで、悩んでいます」と書いていました。彼の周りには自分を助けてくれるような者がいませんでした。

b) 傷ついた心 17節

17節で彼は「私の心の苦しみが大きくなりました」と言っていました。彼のうちには苦悩というものが広がり続けて、その苦しみに押しつぶされそうになっていました。

c) 後悔、罪悪感 18節

18節を見てみると、「私の悩みと労苦を見て、私のすべての罪を赦してください」と言っていました。彼は自分が犯した過去の罪によって、今持っている罪によって思い悩み、罪悪感を覚えていました。

d) 憎しみを抱く敵 19-20節

19-20節に「私の敵がどんなに多いかを見てください。彼らは暴虐な憎しみで、私を憎んでいます。」と書いてありました。ダビデのことを憎んでそのいのちに手をかけようとする数多くの敵によって、彼はねらわれていました。

e) 失望 21節

21節に「誠実と正しさが私を保ちますように。私はあなたを待ち望んでいます」とあります。彼の心には悲しみや後悔がふえ広がっていて、彼の周りには自分を殺そうとする多くの敵たちが迫っていました。彼には神様以外の何ものにも希望を見出すことができない状態にあったのです。彼の置かれていた状態は絶望的なものでした。

このようにして、ダビデが苦しんでいた痛みを見る時に、私たちに通じるものを見て取ることができるのです。孤独や心の苦しみ、罪悪感、また敵からの攻撃や失望、失意。ダビデはそんな苦しみの中で弱っていたのです。しかし、その中であって、彼は私たちに模範を示してくれていました。この詩篇に登場するダビデの姿に対して、スポルジョンもこんな言葉を残していました。「この詩篇のダビデは、忠実な人物の縮図として描かれています。彼の聖なる信頼、多くの葛藤、大きな罪、苦痛を伴う悔い改め、深い苦悩が全てここに揃っており、『神の御心にかなう人』の心そのものを見て取ることができるのです。」と。

○最後まで主に信頼して：ダビデの残した三つの模範

では、ダビデは具体的にどんな模範を私たちに残してくれていたのでしょうか？苦しみの中であって、彼はどのようにして主に信頼しようとしたのでしょうか？残りの部分から、大きく三つのことを見ることができます。一つ目は、主の守りに信頼することです。二つ目は、主の導きと赦しに信頼すること。そして最後三つ目は主の誠実さに信頼することです。それぞれが何を意味するのか、改めて最初から見いきましょう。

1. 主の守りに信頼すること 1-3節

一つ目のダビデの模範、主の守りに信頼することが1-3節に見て取ることができます。ダビデは「:1 【主】よ。私のたましいは、あなたを仰いでいます。:2 わが神。私は、あなたに信頼いたします。どうか私が恥を見ないようにしてください。私の敵が私に勝ち誇らないようにしてください。:3 まことに、あなたを待ち望む者はだれも恥を見ません。ゆえもなく裏切る者は恥を見ます。」と記していました。孤独を覚えて、罪悪感を味わい、さまざまな苦しみを抱えていたダビデがまずしたことは、神様の守りに自分自身を委ね、信頼することでした。これまでに学んできたほかの詩篇でも見てきたことですがけれども、この詩篇も一番初め、太文字の「【主】よ」という呼びかけで始まっていました。言いかえれば、彼はイスラエ

ルの契約の主に対して、自分とも個人的な関係にあるヤハウエに向かって叫んでいたということです。彼の信仰はどんな状況に置かれようと変わることはありませんでした。彼はよく知っていたのです。自分の愛する主がすべてを支配されている偉大な主権者であることを。弱った者には必要な守りや休息を与えてくださる避け所であることを。いつまでも変わらず必ず約束を守られる誠実なお方であることを。自分とともにいつもいて、必要なところに正しい道へと導いてくれる羊飼いでであることを。ダビデはそんな主の姿を忘れることはありませんでした。だからこそ、困難に置かれた彼が目を向けたのは、この世のものでもなければ、自分自身のうちでもありませんでした。彼はただ主を見上げ、「わが神。私は、あなたに信頼いたします。」、そう自分自身のすべてを委ねていたのです。

いろいろな困難に直面する時、私たちはまずどこに目をとめて、何に助けを求めようとしているでしょうか？もちろん、私たちの多くは神様に目を向けることが最もすばらしいことなのだと、これまでに何度も教えられ、そのことを当然のことのように知っているかもしれませんが。でも実際はどうでしょう？私自身もその弱さを持っています。多くの皆さんにとってもそうかもしれません。私たちは試練に直面する時に、まず神様ではなく、自分自身のうちに何かを見出そうとするかもしれません。突然問題が起こった時に、苦しみが降りかかってきた時に、私たちは真っ先に自分のうちに解決策を求めたりするのです。目の前で起こっているその状況に対して、まずどうにかして自分の力でそれを支配しようとするのです。そのために、例えば自分の持っている能力や自分の持っている知恵、またほかの人や物を用いようします。私たちは神様に信頼して祈ることよりも、まず自分自身のうちに問題を解決する策を見出そうとすることがあるのです。

でもダビデはそうはしていませんでした。彼はほかの何にでもなく、ただ神様に心をとめていました。どんな時にも主だけが信頼することができるお方なのだとこのことを信じていたのです。そして彼はそんな信頼する主に対して祈りを捧げていました。もう一度2-3節を見てください。彼は「:2 わが神。私は、あなたに信頼いたします。どうか私が恥を見ないようにしてください。私の敵が私に勝ち誇らないようにしてください。:3 まことに、あなたを待ち望む者はだれも恥を見ません。ゆえもなく裏切る者は恥を見ます。」と祈っていました。これを読んで、一見ダビデが自分の評判を気にしているように思えたかもしれませんが。自分がほかの人から辱められないようにと願っているかのように思います。でも、ダビデがこの箇所で言わんとしたことは、それよりもより深いものでした。

▶「恥を見ない」

ここで鍵になるのが、2節と3節の中で繰り返し出てきている「恥を見ない」ということばです。「恥を見ない」と聞くと、多くの人々が「恥ずかしい思いをする」とか、「人に馬鹿にされる」といった意味を真っ先に思い浮かべるかもしれません。それも間違っているわけではありません。でも、聖書の中で「恥を見」という言葉が用いられた場合、そのことばにはそれ以上の意味が含まれていました。実を言うと、このことばには「失望すること」とか、「何かを信じていたが、結局は信頼に値しないことが判明すること」といった意味があります。それがわかりやすく描かれている新約聖書の箇所があります。ローマ5:3-5で、パウロがこんなことばを残していました。「:3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、:4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。:5 この希望は失望に終わることがありません。」と書いてありました。この箇所の原文をそのまま別のことばで訳すならば、「この希望は恥をさらして終わることはありません」と訳すこともできます。パウロは信仰者が患難さえも喜ぶことができると言っていました。それは私たちが患難を耐え忍べば、それが品性を生み出し、その品性が希望を生み出すと知っていたからです。そこで生み出される希望は、決して虚しく失望に終わることはない、その希望は決して最後に恥をさらして終わることがないからこそ、患難さえも喜ぶことができるのです。ダビデはここで「恥を見ないようにしてください」と願っていました。

彼は言わんとしたのです。神様、私はあなたが必ず約束を守られる信頼できるお方だと知っています。あなたに信頼する者が恥を見ることのないことを知っています。だから、あなたのその御名のゆえに敵が私に向かって勝ち誇らないようにしてくださいと。神様に信頼する者はだれも失望させられることがない、これがダビデ自身も確信を置いたすばらしい約束でした。この主を心から信じて、すべてを委ねる人は決して恥を見ることはない。主に信頼する歩みを最後に振り返った時に、私の神様は信頼には値しない存在だった、そんな主を信じて人生を歩んできたことは間違っていた、恥ずかしいことだ、そんなことには絶対にならないということです。ダビデはその主を見上げていました。今の私たちも同じ主に信頼して歩いていくことができます。だとすれば、私たちがこの神様に対して、どのように信頼しているのかということとはとても大切なことになります。果たして私たちはどんな時も変わらずに、この神様に信頼し続けているのでしょうか？問題が起こった時に、この問題に関して主は本当に信頼できるのだろうか、状況が変わらないけれども、このまま待ち続けていても何にもならないのではないのか、本当に主は働かれるのだろうか——。そうやって困難の中に置かれ、自分の思ったような状況にならなければ、私たちは諦めたり、失意を覚えたりしないのでしょうか？もちろんここで勘違いしてほしくないのは、この方に信頼すれば、すべてが私たちの思いどおりにいくという話ではありません。しかし、みことばが私たちに教えてくれることは、この方を信じて、主のなされることを期待すれば、すべて失望に終わることはないということです。そんな約束が与えられているのであれば、私たちはどんな時も神様に信頼して歩いていくことができます。これから先も必ず試練や問題には直面するけれども、主に忠実に歩もうとすれば、そこには痛みや涙もあるけれども、それでも主を信じて歩いていくことができるのです。

主に忠実に歩もうとする者には、そこには確かにいろいろな迫害があったりします。イエス様もはっきりとヨハネ 15：18－20で「:18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。:19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。:20 しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」と言われていました。私たちが忠実に歩いていこうとすれば、そこには難しさはあります。でも、もし信仰が揺らいでしまいそうになることがあるとすれば、私たちが今見た3節のみことばを覚えることです。3節に「まことに、あなたを待ち望む者はだれも恥を見ません。」と書いてありました。私たちは神様がどのような形で働かれるのかはわかりません。それがいつなされるのかも私たちにはわかりません。でも確信できるのは、神様は決して私たちを失望で終わらせられることはないということです。難しい状況に置かれることはあります。しかし、そんな状況の中で、変わらず主を見上げ、主の守りに信頼すること、これが、私たちが最後まで歩み続けるために大切なことになるのです。

2. 主の導きと赦しに信頼すること 4－7節

続けてダビデが残した二つ目の模範について、4－7節に記されていました。二つ目の模範は主の導きと赦しに信頼することです。

1) 導き

まず、主の導きに信頼するダビデの様子が4－5節に描かれています。「:4 【主】よ。あなたの道を私に知らせ、あなたの小道を私に教えてください。:5 あなたの真理のうちに私を導き、私を教えてください。あなたこそ、私の救いの神、私は、あなたを一日中待ち望んでいるのです。」とあります。ダビデはここで繰り返して、神様が自分に進むべき道を知らせてくれるようにと願っていました。ダビデはいろいろな道を探し求めていたわけではありませんでした。彼はどんな時も主の前を正しく歩もうとしました。だからこそ、主が望まれる生き方をしていくことができるように、あなたの道を、あなたの小道を、あなたの真理を

教えてくださいと願っていたのです。彼は良い時だけでなく、悪い時も、自分に必要なものが何かをわかっていました。敵にいのちをねらわれることがあろうが、周りに助けがなくて孤独を覚えるような時があろうが、神様の導きさえあれば十分だと考えていたのです。

逆を言えば、彼は神様の助けがなければ、自分は正しい道を歩んでいくことはできないとはっきりと認めていたということです。ダビデはそんなへりくだった人物でした。彼は自分の立場が神様の前にどんなものかをよく理解していました。だからこそ言うのです。どの道に進んで行けばいいのか、私にはわかりません。あなたの助けがなければどうしようもありません。でも、主の導きがあれば大丈夫です。あなたの道を、あなたの真理を、あなたの小道を私に教えてください、そうすれば私は大丈夫です。私をそうやって導いてくださいと。こうやって彼は主の導きを祈り求めて、神様のことばに従って、信頼して歩もうとしたのです。これは私たちひとりひとりにとっても、覚えるべき大切な態度です。

私たちはどんな時に不安や恐れを抱いてしまいやすいでしょうか？もちろんそれぞれいろいろな場面を挙げることができると思います。でも一つ言えるのは、私たちが神様のことばに対して、疑いや不安を抱いてしまうような時かもしれません。私たちはこれまでにみことばを学んで、いろいろなことを知識としては持っています。神様はすべてのものを造られました。今も変わらずにすべてのものを支配されています。神様は神を愛する人々のために、すべてのことを働かせて益としてくださる、神様は決して私たちを離れることもなければ、私たちを捨てることもないと。私たちはそのようなみことばを知っています。このような真理を耳にする時に、私たちはそこに喜びを見出すのです。でもある時、いろいろな問題や苦しみが降りかかってくれば、心が騒いで、その喜びが消え失せてしまうことがあります。神様はすべてを支配されている、そう言っていたけれども、今、自分の経験していることは一体何なのだ。決して私を離れずにすべてのことを益としてくださると約束して下さっていたけれども、今の私の状況はそうは見えません。本当に神様のことばに信頼することができるのでしょうかと。自分自身に素直になれば、そんな思いを私たちも抱くことはありません？特に、困難や苦しみに直面する時、そういったものが神様やそのことばに対して、私たちが疑いや恐れを抱くようにと仕向けるのです。その困難は人それぞれ違います。ある人はそれを職場や家庭で経験するかもしれませんが、ある人はだれかとの人間関係において、それを経験するかもしれませんが。いろいろな難しさが降りかかり、先が見えないような状況に置かれて、私たちが自分では理解できないような状況に直面すれば、心に疑問が生じることもあつたりするのです。

では、そんな時はどうすればいいのか？ダビデが私たちに教えてくれていることは、そんな時こそ神様の導きを頼りにして歩むということです。どんな時も、神様の正しい道を歩み続けることができるように祈り求め続けることです。私たちを決して失望させることがないと約束された神様、そしてこの方のみことばこそが、私たちにとってもいつも信頼できる十分なものだと言うのです。イザヤ55：11でも「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」と言われていました。神様のことばは決して虚しく終わることはなく、必ず言われたとおりになるということ、この約束に私たちも確信を置くことができるのです。考えてみれば、神のみこころにかなう人と呼ばれていたダビデが、自分自身の弱さを認めて、自分にはどの道に進んで行くかわからないから、神様の正しく歩むべき道を教えてくれるように、神様にいつも祈り求めていたのです。神様に進むべき道を教えてくださいと熱心に願っていたのです。神のみこころにかなうその人物がしていたのだとすれば、それは私たちにとっても必要だということは言うまでもないですね？私たちの周りの状況は変わっていきます。だからこそ変わることがない、決して揺らぐことのないの神様の真理に身を委ねることです。ここに私たちの希望があります。

2) 赦し

しかし同時に、私たちの経験する問題というのは、私たちを取り囲む状況が原因となって生じるだけではありませんでした。私たちを悩ませる問題というのは、私たちの内からもやって来るのです。それぞれが持っている罪がその原因となることもあります。私たちがだれかに対して、何よりも神様に対して犯す罪によって、自分自身が苦しむこともあります。過去に犯した罪がいまだに良心を悩ませるかもしれない。主の前に静まって祈ろうとしても、いろいろな罪や過去の過ちがちらついて、果たしてこんな自分の祈りに神様が耳を傾けてくれるのだろうか、自分に対してまだ怒っておられるのではないかと不安になって、悲しみを覚えてしまうこともあるでしょう。そんな場合は一体どうしたらいいのでしょうか？ダビデはそのことに関しても模範を残してくれていました。彼は主の導きを求めていただけでなく、主の赦しをも求めていたのです。

6-7節に「:6 【主】よ。あなたのあわれみと恵みを覚えていてください。それらはとこしえからあったのですから。:7 私の若い時の罪やそむきを覚えていないでください。あなたの恵みによって、私を覚えていてください。【主】よ。あなたのいつくしみのゆえに。」とありました。ダビデは、私の若い時の罪やそむきを覚えていないでくださいと願っていました。言いかえれば、彼の心には自分が過去に犯した罪への罪悪感が、罪に対する後悔があったということです。主に対して不誠実だった自分の愚かさが彼のうちには浮かんでいたということです。そのことが彼を苦しめていました。しかし、そんな苦しみの中にあって彼は同時に祈るのです。「【主】よ。あなたのあわれみと恵みを覚えていてください。……あなたの恵みによって、私を覚えていてください。」と。彼は自分自身の罪深さを目の当たりにしました。そしてそれを目の当たりにした時、そこに悲しみや失意をも覚えました。しかし、その中で自分の愛する神様の姿を思い起こそうとするのです。そして何よりもいつも変わらない神様のあわれみに、恵みに、赦しというものを求めていました。神様のあわれみ深さに希望を見出そうとしたのです。

これは私たちにとっても重要な真理です。私たちがいつも覚えておかないといけないことは、聖書が私たちにはっきりと教えていることです。神様が私たちひとりひとりをご自身の目的のために創造されたということです。だからこそ私たちは、本来であれば生まれながらに神様に従って、この方のすばらしさをあかししていくという目的のために造られました。しかし、私たちは罪のゆえに、だれもそのように生きていこうとはしませんでした。代わりに、私たちは創造主である神様に逆らい、自分の望むままを生きようとしたのです。当然、神様はこんな私たちを見逃されるお方ではありませんでした。この方は私たちの自分勝手な行いや、心のうちで思っていること、考えていることをご覧になって、それをそのまま良しとされるようなお方ではありませんでした。神様は聖く正しいお方であるからこそ、すべての罪をさばかれるのです。だからこそ、私たちはみな例外なく神様の燃える御怒りを受けてさばかれて当然の存在でした。しかし、そんな希望などなかった私たちのために、救い主イエス・キリストが与えられたのです。完全な神であり、完全な人として、この地上に来られた主は、何の罪もない完全な生涯を送られました。この方がなされたことも、この方が話されたことも、この方が考えられたことも、その思いも、それらすべてのうちに一つの罪をも見出されませんでした。こうしてキリストは神様をあかしする者として、その生涯を完璧に歩まれました。罪のゆえに、私たちには決してできなかったことをこの方が成し遂げられたのです。そして本来であれば、罪を犯して神の敵として歩んでいた私たちこそがさばかれて当然であるにも関わらず、罪の全くなかったこの方が私たちを愛してみずから進んで十字架にかかり、ご自身のいのちをささげてくださいました。私たちに代わって、私たちが受けるべき罪に対する神様の御怒りを耐え忍んで、罪の贖いを完成されたのです。そして死から復活されたこの方は、ご自身のもとに悔い改めと信仰を持ってやって来る者に救いを与えて、そしてその者を義と認めてくださったのです。

パウロもⅡコリント5：21で「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。」と述べていました。もし今なお、神様に逆らって、自分の人生は自分の望むままに生きればよい、それで何ら問題はないと考えている人がいるのであれば、神様は今も変わらずにあなたのすべての罪をご覧になっているということです。周りの人には知られていない、そんなものがあつたとしても、心のうちもすべてご覧になれるこの方は、それをすべて知っておられます。そして聖い神様は、それらすべてに対して必ず正しいさばきをお与えになるのです。この方の前に言い逃れをすることができる者はいません。必ずさばきの日はやって来ます。だからこそ救いが用意されているきょうこの日に、まだイエス・キリストを自分の救い主として、主として受け入れていない方がいるのであれば、この方を信じ、受け入れてください。この方はご自身のもとに、心碎かれて悔い改めてやって来る者の罪を赦して救いを与えてくださるとそう約束してくださいました。その救いをきょう自分のものとしてください。もうすでに主イエスを信じて、この方を愛する者として歩まれている兄弟姉妹の皆さん、今、改めて考えましたけれども、福音の真理こそ私たちがいつも覚えておかなければいけないことです。確かに私たちはかつて羊のようにさまよい、神様に逆らって生きていました。しかし、キリストを信じた今は感謝なことに、神様は私たちの罪をもう以前のようにご覧にはならないのです。主は私たちの罪を覚えてはいないのです。もちろんこれは神様が私たちの罪を忘れてしまうわけではありません。神様はもちろんすべてのことをご存じで、しかしそれでもなおご自分のものとなった者のご覧になる時に、そういった罪を思い出されようとはしないということです。救われた後も、残念ながら私たちのうちには罪の性質が残っています。だから私たちは罪を犯してしまうのです。しかし、キリストの犠牲によって罪の代価が完全に支払われ、キリストにあつて義とされているからこそ神様はそんな私たちを見る時に、義なる者として私たちを扱ってくださいます。

ダビデは主の赦しに関して、すばらしい約束を別の詩篇でも記していました。詩篇103：10-12に「：10 私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。：11 天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。：12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。」と書いていました。信仰によって主を信じて、恵みによって罪を赦された者は今、キリストのうちにかくまわれているのです。だからこそ、神様が私たちをご覧になる時、神様は私たちの罪ではなく、私たちのうちにあるキリストの完全な義を目にされるのです。私たちが完璧な歩みをしたのではありません。キリストが私たちの代わりに完璧な生涯を過ごされ、そしてその義が私たちに与えられたのです。これが神様の示してくださいました愛でした。これが神様の私たちに対する、いつまでも変わらない恵みでした。ですから、私たちが困難な状況に置かれて、道に迷う時に、私たちは神様の導きに信頼することができます。私たちのうちに罪が見出される時も、私たちはその罪を告白して、赦しを求めて、主のあわれみを期待することができます。ここに私たちは希望を見出すことができるのです。主の導きと赦しに信頼すること、これが、私たちが最後まで歩み続けるために大切なことになるのです。

3. 主の誠実さに信頼すること 8-15節

そして最後、ダビデが残した三つ目の模範は、主の誠実さに信頼することでした。8-15節に「：8 【主】は、いつくしみ深く、正しくあられる。それゆえ、罪人に道を教えられる。：9 主は貧しい者を公義に導き、貧しい者にご自身の道を教えられる。：10 【主】の小道はみな恵みと、まことである。その契約とそのさとしを守る者には。：11 【主】よ、御名のために、私の咎をお赦してください。大きな咎を。：12 【主】を恐れる人は、だれか。主はその人に選ぶべき道を教えられる。：13 その人のたましいは、しあわせの中に住み、その子孫は地を受け継ごう。：14 【主】はご自身を恐れる者と親しくされ、ご自身の契約を彼らにお知らせになる。：15 私の目はいつも【主】に向かう。主が私の足を網から引き出してくださいますから。」と記されていました。ここまできことばを見てきて、ある人はこう思っているかもしれません。確かにこれまで見てきたことはす

ばらしい、でも私がどれほどの苦しみを味わっているのかをあなたはわかっていませんと。もちろん自分だって主に信頼したいけれども、それが今、不可能なように思えます。直面している苦しみが大きければ、大きいほど、その痛みや悲しみが長引けば長引くほど、心も体も疲れ果ててしまって、喜びや希望を見出すことができないと。果たしてそんな厳しい状況に置かれたら、私たちはどうしたらいいのでしょうか？自分自身もひどい苦しみを味わっていたダビデが、私たちに励ましとして残してくれていた模範は、変わらずに神様の姿に心をとめることでした。彼は自分の置かれている状況に心を支配されたり、自分がその状況をどう思うのか、自分がその状況をどう考えるのか、感じるのかに心を奪われることはありませんでした。彼は目に見えるものや、自分が感じているものにとられるのではなく、目には見えないけれども、確かな神様の偉大なご性質に信頼を置いていたのです。

8節にこんなすばらしいことが書いてありました。「【主】は、いつくしみ深く、正しくあられる。それゆえ、罪人に道を教えられる。」と。主はどんな人に慈しみ深く道を教えられると言われていました？それは罪人に対してでした。これまでも触れてきましたけれども、このことばを記したダビデは、自分自身が罪人であることをよくわかっていました。自分自身も姦淫や殺人の罪を犯したことをわかっていました。でも、そんな自分のような者にさえ神様が道を教えてくださると述べていたのです。つまり、この神様は、私やあなたのような罪人でさえも、あわれみによって導いてくださると言うのです。また、10節にも「【主】の小道はみな恵みと、まことである。」と記されていました。よくこのことばを考えてみてください。神様が私たちの歩みのうちになされることで、恵みとまことに基づかないものはどれぐらいあるのでしょうか？その答えは「一つもない」です。主の小道は全部恵みとまことであると書かれていました。この神様は罪人に道を教えると約束されただけでなく、その道はすべてあわれみに基づくものなのだ、すべてが恵みとまことに基づくものなのだと言われたのです。言い換えれば、神様が私たちを導かれる時に、その道はすべて私たちを傷つけたり、私たちを悲しませることが目的ではないということです。苦しみや試練も同じです。それらすべては、私たちの益のために、神様が用意してくださっているものになるのです。あわれみ深い、正しい神様が導かれるその道を私たちは安心して進んでいくことができます。それはすべてが主の恵みとまことであるからです。

私は今、あえて幾つかのことばを飛ばして読みました。もう一度8-10節を見てください。ダビデはどんな罪人に対しても主が道を教えられるとは言っていませんでした。「:8 【主】は、いつくしみ深く、正しくあられる。それゆえ、罪人に道を教えられる。:9 主は貧しい者を公義に導き、貧しい者にご自身の道を教えられる。:10 【主】の小道はみな恵みと、まことである。その契約とそのさとしを守る者には。」、主は一体だれにご自身の道を教えられるのでしょうか？それは「貧しい者」、主の「契約とそのさとしを守る者」でした。言い換えれば、神様はご自身の前にへりくだる者、主の教えに聞き従う者、そんな罪人をご自身の道へと導かれると言うのです。また、12節や14節にもこのように書いてありました。12節を見ると、「【主】を恐れる人は、だれか。主はその人に選ぶべき道を教えられる。」、14節も「【主】はご自身を恐れる者と親しくされ、ご自身の契約を彼らにお知らせになる。」と。主はだれにご自身の道を教えられるのか？ここで言われていたのは主はご自身を正しく恐れる者に対して、選ぶべき道を教えられるということでした。つまり高慢な者や主を恐れず、従順でない者に対してはそうはなさらないということです。これを聞いて、恐ろしくありません？なぜなら、私たちが正直に自分自身のうちを見れば、そこには高慢さや不従順な思いがあるのを私たちはよく知っているからです。私たちは神様のみことばにいつも聞き従うことができない自分がいるのを知っています。では、果たして神様はこんな私たちに対して道を教えてくれるのでしょうか？それともこんな私たちには、もう扉が閉じられているのでしょうか？正しい道へと導かれずに、最後までたどり着くことができないでおしまいなのでしょうか？この詩篇を通して、神様が教えてくれていることは、もし私たちが最後までたどり着くためのその土台が、私たち自身の知恵や力、自分自身の正しい行いや自分自身の感情や気持ちに基づくのであれば、私たちは

絶対に希望を失ってしまうということです。ダビデが私たちに示してくれていた模範は、私たちが自分自身のうちを見るのではなく、自分たちの外側を、神様の変わらないあわれみや恵みを覚えなければいけないということでした。そうでなければ、私たちの土台はすぐに揺らいでしまうのです。

だからこそ、ダビデは続けて11節でこう述べていました。「【主】よ。御名のために、私の咎をお赦してください。大きな咎を。」と。この「御名のために」とことばはどういう意味でしょうか？簡潔に言うのであれば、これは主ご自身のご性質をまとめて表したものです。ですから、ダビデはここで「【主】よ。……私の咎をお赦してください。」と言うのです。私にそれが値するからではありません、ただ主よ、あなたのその偉大なご性質のゆえに、私の咎を赦してくださいと。ダビデは自分自身も神様の教えに対して、いつも従順ではなく、その戒めを守れていないことをわかっていました。主の前に、大きな罪を持った存在であると認めていました。でも同時に、神様が赦しに関して以前約束されていたことを、そしてその約束を必ずこの方が守られる誠実なお方であることを彼は覚えて、それに信頼していたのです。ここに彼の希望の基盤がありました。彼の希望は、彼自身のうちにあったのでも、置かれている状況にあったのでもありませんでした。神様は約束を守られる誠実なお方であるからこそ、それが彼の心に最後まで忠実に歩み続けるための喜びの力を生み出していたのです。ダビデはどんな状況にあっても、この方のうちにのみ必要な助けがあることをよくわかっていました。だからこそ、そんな偉大な神様を、彼はいつも見上げていたのです。15節にも「私の目はいつも【主】に向かう。主が私の足を網から引き出してくださるから。」と書いていました。私の目はいつも主に向かう、ここに救いがあるからだ。これが、彼が持っていた揺るがぬ信仰でした。

確かに彼は孤独を覚えていました。しかし、いつも神様に目をとめていたからこそ、彼は主の導きのうちに安心を見出すことができたのです。確かに彼の心は傷ついていました。しかし、いつも神様に心をとめていたからこそ、彼は主の守りのうちに安らぎを見出すことができました。確かに彼の心には罪悪感や後悔がありました。しかし、神様に心をとめていたからこそ、彼はへりくだって赦しを求め、主のあわれみを見出すことができました。確かに敵が迫っていた彼の心は苦しみ、失意の中にありました。しかし、いつも神様に目をとめていたからこそ、彼は主の救いのうちに希望を見出すことができました。神様がどれほどあわれみ深い存在であり、誠実なお方かを知り、この方が導いてくれる道が、すべて恵みとまことであふれていること、益になるということを知っていたからこそ、ダビデはどんな困難に遭おうとも失望することなく、諦めることはありませんでした。私たちも同じです。もし私たちが今の自分自身と、この世での人生を終えようとしている自分自身の姿を思い浮かべて、ここからそこにたどり着くための原動力を、自分のうちに見出そうとするのであれば、その旅路はどう考えても不可能なように思えるでしょう。途中で正しい道から外れてしまったり、恐れや不安でいっぱいになったり、さまざまな苦しみによって心が折れて諦めてしまうかもしれません。だからダビデの姿を覚えることです。私たちは、この地上での人生を自分の力で乗り越えていくではありません。自分ひとりでその道を行く行くのでもありません。神様がともに歩んでくださるのです。私たちが歩むべき正しい道へと導いてくださる、その方が一緒に進んで行ってくださるのです。ダビデはそのことをわかっていました。そのことを学び続けたのです。だからこそ、私たちがこうやっっているいろいろな詩篇を見る時に、主に信頼する姿を見ることができます。以前見た詩篇23篇でもはっきりと述べられていました。23:4に「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたと私とともにいられますから。」と。主がともにいてくださるということが、彼がいつも堅く持っていた希望の基盤だったのでした。

○まとめ 22節

では、私たちはどうでしょう？ダビデは、この詩篇の最後22節で「神よ。イスラエルを、そのすべての苦しみから贖い出してください。」とまとめていました。彼はこうやって自分個人のことだけではなく

て、同じように苦しんでいたイスラエルの民のことも祈りに含めていました。もっと言えば、今を生きる私たちひとりひとりも、きょう学んできた真理に当てはまるということです。ダビデとともに歩まれた神様は、今を生きる私たちとともに歩んでくださるのです。だとすれば、だれに目を向けて歩もうとするかです。神様は私たちにも今も変わらず言われています、安心して信頼しなさいと。たとえあなたが道につまずいたとしても、わたしがあなたを支えます、わたしに信頼して歩む者は決して恥を見ることはありませんと。わたしが最後まで導きますと。わたしの御名がそれを成し遂げようと。

私たちには次の瞬間何が起こるかわかりません。でも次の瞬間も、すべてをご存じでおられる方が私たちとともにおられるのです。どんな困難や試練がこの先、私たちに待ち受けているのか、私たちにはわかりません。でもそれらすべてのことを益とされるお方が、ご自身の栄光のために働かれるお方が私たちとともに歩んでくださるのです。いろいろなことが私たちにわかりません。でも、私たちにはわかっていることがあります。主が私とともに歩んでくださるということです。主の守りに信頼を置き、主の導きと赦しに信頼を置き、そして主の誠実さに信頼を置いて歩いていくことです。ここに私たちの希望があります。いつの日か今、私たちが苦しんでいることや試練、そういったことから解放される日がやって来ます。私たちが主とお会いして、主の栄光をほめたたえ、主とともに賛美をするその日は、必ずやって来るのです。この希望を覚えて、その日を楽しみにしながら、主に信頼して歩いて行きましょう。